

主 題：七つの封印のある巻物
聖書箇所：黙示録 5章1-14節

黙示録5章をお開きください。前回私たちは4章を通して、天においてどういうことがなされているのかを見て来ました。今日はその続きです。この5章は天で一体何が行なわれているのかを私たちに明らかにしてくれています。5章は1節、2-5節、6-10節、11-14節と四つの区分に分かれます。というのは、それぞれの区分が「私は見た。」ということばで始められています。それに沿って5章のみことばを見て行きたいと思います。

A. 神の右の手にある巻き物 1節

1. 巻き物

5：1、日本語では「また、私は、御座にすわっておられる方の右の手に巻き物があるのを見た。」と書いてありますが、ギリシャ語ではまず「私は見た。」ということばで始まります。天にあって、まず御座に着座しておられるその神を見たわけです。ヨハネはその神の右の手に巻き物があるのを見ます。この「右の手に」とあるのは、右の手の上にあるということです。原語ではそのように記しています。つまりその方の右の手が開かれていて、その掌の上にこの巻き物が乗っていると。もちろん皆さんは神が体を持っていないことをよくご存じです。我々にわかるように、擬人法でその様子を表してくれているわけです。まさに人の掌の上に乗っているように、神の御手のうちに巻き物があつたのだと。この当時、紙は存在しませんので、パピルスか羊皮紙のどちらかです。このパピルスに関して、バークレーという神学者が非常に興味深い説明をしているのでご紹介します。「パピルスは縦横25センチ×20センチほどの1枚の紙状のもので、長文を書く場合にはこれを横につなぎ合わせて用いた」と。当時、どういうものが使われていたのかがわかると思います。「文字は7センチ幅の欄内にぎっしり書き込まれ、その欄と欄の間には2センチの余白が設けられていた」と。ですから文章を書いた後、文章と文章の間には2センチの余白があつたと言われています。「この巻き物の両端には普通、木の巻き棒がついており、読む時にはこれを左手に持って右手で開き、読んで行くにつれて左側の部分を巻き取って行くようになっていた」と。ですから左手で巻き取り棒を持って、右の方に順番に見て行ったという説明がされています。巻き物と言われても、我々にはなじみがありませんが、そういうものであつたらうと言われています。

2. その特徴：

さて、「それは内側にも外側にも文字が書きしるされ、七つの封印で封じられていた。」と、その巻き物の特徴が二つ記されていました。

1) 「内側にも外側にも文字が書きしるされ」

一つは「内側にも外側にも文字が書きしるされ」ていたとあります。普通は内側だけに文字を記しますが、それでも足りない場合は裏面にも書きました。ですから、大変多くのメッセージがここに記されていると言っているのです。

2) 「七つの封印で封じられていた」

二つ目の「七つの封印で封じられていた。」というのは、私たちも本や映画などで、蠟で封をする封蠟というのを見たことがあります。そういうものが使われていたのかもしれませんが。しかし大切なことは、「七つの封印で封じられていた。」というのはどういう意味なのかです。これを理解するために、先ほどお話ししたバークレーという神学者は非常に興味深い説明をしてくれています。彼は「これは遺言の意味があるだろう」と言うのです。「ローマの法律によれば、遺言は7人の証人がそれぞれ封印をし、開く場合には7人の証人全員、または正式の代理人が立ち会わなければならなかった」と。ローマの法律に基づいて遺言を残す場合には7人の証人たちがそれぞれ封印をし、その7人の証人、もしくは正式な代理人が立ち会うことなくして、その封印を解くことはできなかった。恐らくこのことを受けてこの話がされているのでしょう。確かに私たちがみことばを学ぶ時、21世紀の日本の私たちの目で見てもわからないことは山ほどありますが、メッセージは当時の人々に一義的に与えられているものですから、一つのルールとして、我々はそれを受け取った人たちがどのように理解したのかを知ることが必要です。恐らくその当時の人たちは、「七つの封印で封じ」ということに関しては遺言でよくわかっていて、この話を聞いた時に、彼らはすぐにそのことを理解したと考えられます。

B. 巻き物を開いて封印を解くにふさわしい存在 2-5節

1. 御使いの声 ダニエル 12：4

さて、この巻き物が開かれる必要があるのですが、その「巻き物を開いて、封印を解くにふさわしい」存在に関して、2-5節に出て来ます。原語には、この2節の初めにも「私は見た」ということばが記されて

います。「また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、『巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。』と言っているのを見た。」とあります。ここに「ひとりの強い御使い」と出て来ます。これはダニエル 12 : 4 で、「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。」とある天使がダニエルに対して話しているところが出て来ます。この天使はガブリエルです。そこでこの「強い御使い」というのはガブリエルのことではないかと言う人がいますが、そのことは記されていませんのではっきりしたことはわかりません。しかし、この「ひとりの強い御使い」が「大声でふれ広め」と、ここに書いてありました。この天使は、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と、全世界に聞こえる大声でこのことを問われたのです。「封印を解くのにふさわしい者」、その価値のある人はだれなのかというのが天使の発したメッセージでした。先ほどのローマの遺言を開くためには、だれでもいいわけではない、封印をした人か正式の代理人でないといけなかった。それでだれが神の巻き物を開くことができるのかと問いかけたのです。

なぜこの巻き物を開く必要があるのか——。ウィリアム・ヘンドリックセンという神学者はこう説明します。「封印を解いて巻き物を開くことは、神のご計画を啓示するだけではなく、それを遂行することを意味する。」、つまり、この巻き物が開かれることによって神様がこれまでに計画しておられたこと、神がこれまでに約束されて来たことが実際に始まるということです。今5章を見ていますが、次回から見る6-19章はこの地上に神がどのようなさばきをお下しになるのかが書いてあります。しかし、それが始まる前には、そのことが記された巻き物が開かれて、そしてそのことが実際に起こって行く。だからこの巻き物が開かれることが必要であると。

3節「しかし、天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻き物を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかった。」とあります。この「天にも」というのは天にいる天使たちの話です。「地」というのはそこに住む人間たちの話です。「地の下」と言われているのは、もう既になくなった人たちのことです。これまでに亡くなった過去の信仰の勇者たちも含めて、あのアブラハムにしても、モーセにしても、ダビデにしても、ダニエルにしてもだれひとりとしてこの巻き物を開く価値のある、それにふさわしい人はいない。彼らでさえもこの巻き物を開くことはできないと言うのです。だからヨハネは4節「巻き物を開くにも、見るのにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったので、私は激しく泣いていた。」。だれひとりとしてこの巻き物を開く価値のある存在がいないと彼は大きな失望を覚えるわけです。

2. ふさわしいお方 5節

5節をみると、「すると、長老のひとりが、私に言った。『泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。』」、ここでこのメシヤに対して二つのよく知られた称号を用いて、この人がこの封印を解くのにふさわしいのだと、長老のひとりがヨハネに告げるのです。ここには救世主の二つの称号が記されています。一つは「ユダ族から出たし」であり、もう一つは「ダビデの根」です。この長老は、泣き悲しんでいるヨハネに対して、それにふさわしい人がいることを明らかにします。その方は救世主だと。そしてこのような二つのタイトルを用いてその救世主の説明をしました。

1) 「ユダ族から出た獅子」

まず最初は「ユダ族から出たし」です。創世記 49 : 9 に「ユダは獅子の子」であると記されています。なぜかという、この部族から出て来る崇高なものは獅子と呼ばれるにふさわしいお方であると預言しているのです。このユダ族から獅子、ライオンと呼ばれるにふさわしい崇高な人物が出て来るという預言です。なぜ獅子ということばが使われているかという、ライオンというのは野獣の王です。このユダ族から出て来る人物も同じように力があって、勇気があって、威厳があって、知恵があるお方。まさにすべてのものの王と呼ぶにふさわしい方がこの部族から出て来るという預言していたわけです。ですからこのユダの獅子というのは、救世主に対して使われているのです。

2) 「ダビデの根」(黙示 22 : 16)

もう一つは「ダビデの根」とあります。イザヤ 11 : 1 では「エッサイの根株」、また 10節には「エッサイの根」と出ています。ダビデの父親です。その家系からこの救世主が生まれて来ることを預言しているわけです。ですからここを見た時に、ユダヤ人たちがよく知っている救世主こそがこの封印を解くのにふさわしいお方なのだということを明らかにしたのです。これはイエス様のことです。彼こそが約束の救世主であり、またその救世主としての使命をあの十字架で果たされたお方です。

5節には「ユダ族から出たし、ダビデの根が勝利を得た」とあります。何かに打ち勝ったということです。つまり主イエス・キリストは私たちがどうすることもできない死に対して、敵であるサタンに対して完全な勝利を治められた、既にもうこのような者に打ち勝たれたのだと明らかにします。その方だからこそ、この方だけがこの封印を解く価値があり、その権利をお持ちのお方だと。

C. ほふられた子羊 6-10節

次、6-10節を見ると、ここに三つ目の区分があります。また「私は見た。」ということばで始まっています。

1. 子羊 6節

6節に「さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる。——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。」と、「小羊」の話になっています。前回見たように、ヨハネは栄光に満ちあふれ、まぶしく光輝く主なる神の御座を見ます。そしてその周りには神をたたえ続けている「四つの生き物」、そしてともに心から主をほめたたえている「長老たち」の姿を改めてここに見るのです。ところが前回と違ったところがあるのです。それはこの神をたたえている人々の真ん中に「小羊」を見るのです。すべての被造物が、すべての救いに与った者たちがこの「小羊」をほめたたえている光景です。

その「小羊」に関してこの6節が教えるわけですが、ここに「ほふられたと見える小羊が立ってい」とあります。「ほふられた」というのはいけにえをほふる、殺すということです。「ほふられた」と書かれていて、ここで使われている時制は完了形です。なぜこういう時制を使ったかということ、それはこのいけにえによってもたらされる効果はその時だけではなくて、その後もずっと続いているということです。イエス様のあの十字架によって達成されたのは救いです。主イエス・キリストの十字架によって、イエス・キリストを信じるすべての人の罪が赦される、救いです。その効果がそこで終わったのではなくて、その後も継続していると。イエス様が十字架に架かれて、そしてその三日後に死からよみがえって来られた。もう約2000年たっているにもかかわらず、その力は全然すたれていない。主イエス・キリストによって今でも、どこの国の人であろうと、だれであろうと、この救いに与るのです。この箇所は我々にそのことを明らかにしてくれるのです。しかも「小羊」は座っているのではなくて立っています。我々の罪のために十字架で死んで、その死に敢然と勝利されてよみがえられた主、その方は今も生きている。主イエス・キリストは今も生きておられることを、このみことばは我々に教えてくれます。

そして、この方をすべての被造物が、救われた者たちがほめたたえています。この救いに与ったすべての者たちの目が「小羊」に注がれているのです。あなたや私のために救いを成し遂げてくださり、このすばらしい救いに招いてくださった「小羊」がすべての者たちによってほめたたえられている様子です。すべての救われた者たちは心の底からこの「小羊」に感謝をささげています。その賛美の、その感謝の歌声がどんどんエスカレートして、この宇宙の隅々まで届くような大きな声で彼らがたたえている様子です。

2. 子羊の特徴 6節

そしてこの6節は、私たちにこの「小羊」がどういう存在なのかを教えています。6節に特徴が出て来ます。「これに七つの角と七つの目があった。」とあります。この「七」という数字は聖書の中では完全な数字と言われます。

① 「七つの角」

聖書の中で「角」というのは力や強さの象徴です。そうすると、「七つの角」というのは、力において強さにおいて完全なお方ということです。完全な力を持っておられる方、全能のお方という意味です。

② 「七つの目」

「七つの目」というのは、すべてのものを見ておられる、しかも「七つ」ですから完全にです。そこですべてのことを完全に知っておられる方、全知のお方であると。

こうしてこの「小羊」の説明がされています。「その目は、全世界に遣わされた神の七つの御霊である。」とあります。この聖霊に関しては1:4や4:5で学んで来ました。この聖霊が全世界に遣わされているのは、さばきを行なうためです。ひとりひとりの心の中をしっかりと調べた上で、このさばきを行なおうとしています。ですから、神様が下されるさばきには、父なる神も主イエス・キリストも聖霊なる神様もみんな関わっているということです。

3. 巻き物を受け取った子羊 7-10節

そして今度7-10節を見ると、巻き物受け取った「小羊」の話です。「7 小羊は近づいて、御座にすわる方の右の手から、巻き物を受け取った。8 彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、」と続いて行きます。遂に神様のさばきがこの世に下される時が来たのです。神がこの世に警告して来られたそのご計画が遂に始まろうとしているのです。そして今見たようにこの巻き物を開き、封印を解くにふさわしい方がこの巻き物を受け取った時に、すべての者たちがこの「小羊」に賛美を捧げています。8節の続き「おのおの、立琴と、香のいっばいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。」、このような姿が描かれています。

・「琴」 I 歴代誌25:1-4

まず「琴」と出て来ます。「琴」という楽器は、旧約聖書の中で賛美や礼拝の時に用いられていたことを思い出されるでしょう。ダビデも琴を弾いていました。でもここでは楽器の「琴」よりもある別の意

味でこれを使っています。それは、この「琴」というのは、預言と密接に関係しているのです。Ⅰ歴代25：1に「**ダビデと將軍たちは、アサフとヘマンとエドトンの子らを奉仕のために取り分け、立琴と十弦の琴とシンバルをもって預言する者とした。**」と書いてあります。ですから「琴」は音色を奏でるだけでなく、預言と非常に関連しています。それでここで使われている「琴」は、恐らく預言と関係したものでしょうと。ジョン・マッカーサー先生は「各長老たちが琴を持っているというのは、恐らく預言のすべてを象徴しているのだろう」と言われています。

・「香」 詩篇141：2

二つ目、「香」と出て来ます。お香のことです。これは8節「**この香は聖徒たちの祈りである。**」と教えます。ですからこの「香」というのは祈りのことです。聖徒たちが祈っていたということです。

・「金の鉢」

三つ目にこの「**香のいっぱいはいった金の鉢**」と出て来ます。この「鉢」というのは、幕屋や宮で使われていました。Ⅰ歴代誌28章にダビデがソロモンに、こんなふうにつくりなさいと神殿の仕様書を授けたことが記されています。その後ソロモンは純金の鉢を作ったということがⅠ歴代誌28：17に出て来ます。言われたようにソロモンは「**金の鉢**」を作ったのです。その中に、この神殿で用いられる「香」がいっぱい入っていたとあります。先ほど「立琴」は預言と関係していて、「香」は祈りであると見てきました。それがいっぱい入った「**金の鉢**」がある。恐らくここで言わんとしたことは、このようにさばきもたらし、世を新しくするという神様の預言が、そしてその預言の成就を祈って来た人々の祈りが今まさに聞かれようとしているということです。神が長きにわたって警告を与えて来られたその終わりの時が、人々が祈り求めて来たその時が今まさに来ようとしていると。

8節の続きは、「**四つの生き物**」と「**二十四人の長老**」たちは今見て来た三つのものを持って「**小羊**」の前にひれ伏しています。彼らは9節「**彼らは、新しい歌を歌って言った。**」とあります。今から見て行くこの「**歌**」というの、「**新しい歌**」です。別の言い方をすれば、贖いの歌、救われたことの歌です。それがこの9-10節の中に記されています。

◎ 子羊こそが封印を解くにふさわしい方である三つの理由

まず、9節「**あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。**」と、この方だけがふさわしいということを言って、その後になぜこの方だけがふさわしいのか三つの理由を挙げています。「**あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、**」10 私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」、この中に、この「**小羊**」こそが、つまりイエス・キリストこそがこの巻き物を解くにふさわしいお方である三つの理由が記されています。

① 「いけにえ」

一つ目はいけにえです。「**ほふられて**」とあります。かつては動物がいけにえとして、罪人の身代わりとして殺されました。しかし、今から約2000年前、神のいけにえである主イエス・キリストが我々罪人の身代わりとなって殺されました。この箇所が言うように彼は「**ほふられ**」たのです。いけにえとして殺されたのです。

② 「市場で購入」

二つ目に記されていることは、市場で購入したということです。どこに書かれているかという、9節の終わりに「**贖い**」ということばが出ています。それがそういうことです。「**ほふられ**」た「**小羊**」の「**その血**」によって、「**あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い**」と。この箇所が教えてくれていることは、我々罪人をその罪から永遠の刑罰、また神の呪いである地獄から救い出すために、主イエス・キリストはご自分の血を、すなわちご自分のいのちを犠牲にしてくださった。いのちという最も高価な代価、代金を払うことによってあなたや私をその罪から、滅びから救い出してくださった。この「**贖い**」というのは市場で代金を払って買うということです。神は罪の奴隷の市場の中で罪の奴隷として生きていたあなたや私をご自分のいのちという大変な代価を払って買い取ってくださった。

③ 「救い」

三つ目に出て来るのは救いです。「**この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。**」、この「**王国とし**」てというのは、あなたや私を神の王国に属する者としてくださったということです。「**祭司と**」してというのは、神様はあなたや私を神の祭司としてくださったということです。「**地上を治める**」というのはもう何度も我々は学んで来ました。後にこの1000年王国において、主イエスとともにこの地上を治める者としてくださる、そういう人に私たちを生まれ変わらせてくれたということです。

ですからこの9-10節が私たちに教えてくれたのは、主イエス・キリストご自身がまさにいけにえとしてご自身のいのちを捨ててくださり、その尊いいのちによって、その血潮によって、あなたや私をその罪から買い取ってくださり、そして私たちを神の王国に属する者、神の祭司とし、そして神とともにこの地上を治める者として、生まれ変わらせてくださった。だからあなたはこの巻き物を受け取って

これを開く、その価値がある、それにふさわしいお方だと彼らはたたえるのです。そのとおり、アーメンだと思いますか？この方があなたや私のために本当に何をなしてくださったか——。宗教家は山ほどいるでしょう。宗教の教祖は山ほどいるでしょう。しかしこのイエス・キリストのような方はどこにもおられない。神でありながら人として来られ、ご自分のいのちを犠牲として、いけにえとして捨ててください、いのちをもってあなたや私を買い取ってください、救ってください。この後も賛美が続くのは当然の話です。この方のすばらしさを覚えて人々が礼拝するのは当然のことです。

救いに関して、賛美がなされたことを今見て来ました。救いに関して次のことをしっかり覚えてください。9節に「あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、」——まさにそれは私たちの話です——、「人々を贖っ」たとありますが、だれのためにと書いてあるかということ、「神のために」です。10節には「私たちの神のために」と書いてあります。これが救いの目的なのです。救いというのは、ただ地獄から救われたというだけの話ではないのです。神の救いというのは、神に逆らってきた罪人を生まれ変わらせて神のために生きる者、神にとって役に立つ人へと生まれ変わらせることです。だから私たち救われた者たちがこの神様に従って行きたい、この神が喜ばれることをして行きたいと願うのは、そのような人へと生まれ変わったからです。私はイエス様を信じて救われたから地獄に行かなくて済みます、永遠の保証がしっかり得られたから、さあこれから私は自分の好きなように生きて行きますという人はたくさんいるかもしれない。でも聖書の教えるクリスチャンというのはそうではないのです。神によって救われた人々、神によってこの救いに与ったクリスチャンたちは、自分のために生きて来たこれまでの人生を終わらせて、今度は神のために生きようとする、そのように生まれ変わった人たちだということです。神様は、あらゆる部族やあらゆる国語、あらゆる民族や国民の中から、神ご自身のために我々を贖ってください。贖われた私たちが贖ってくださいその方のために生きるためにです。私たちを「王国とし、祭司と」した、「地上を治める」のだと。神ご自身のためにそのようにしてくださいました。

ですから私たちが覚えなければいけないのは、救いというのは神様にとって全く役立たずで、どうにもならなかった私たちを、神にとって役に立つ者へと生まれ変わらせてくださるということです。神に背を向けて生きて来た私たちが神に従う者と生まれ変わる、それが救いです。自分のために生きて来た私たちの人生を、これは神が託してくれたものだから、神のために生きて行こうとするようになる、それが救いなのです。その目的を持って神はあなたを贖い、その目的を持って神はあなたを救ってください。だから救われたあなたがその目的を持っていなかったら、ひよっとしたら救われていると思っただけかもしれない。神が与えてくださる救いというのは、私たちのうちにこういう働きをなしてくれるのです。このみことばはそのことを我々に教えてくれるのです。

皆さんは救いの目的を忘れていませんか？主はあなたを生まれ変わらせるためにこのような犠牲を払ってくださいました。神のために生きるという本来の目的に沿って生きて行く、そういう人へとあなたを造り変えてくださるのです。みんなそのために造られたのです。神のために生きる人生なんて堅苦しくて喜びがないのではないかと人は思うかもしれませんが、いいえ、我々の人生はそのために造られたのです。今、我々はそうした関係を見ることはありませんけれども、すばらしい主人と、それに仕えている奴隷はすばらしい関係を持っています。奴隷がこの主人に仕える時に喜びがあります。奴隷が主人を愛するだけではない、主人も奴隷を愛している。それが私たちと神様との関係です。かつての私たちはその主人を全く無視して好きに生きていた。でも主は私たちを生まれ変わらせてくださって、その主人を愛し、その方に喜んで従う者へと生まれ変わらせてくださった。感謝して喜びながら従う者です。そこに本当の自由があり、そこに本当の喜びがあり、そこに本当の満足がある。なぜなら、それらは神しか与えることのできないものです。我々は神以外のところにそれらを見つけようとして来たわけです。感謝なことに神は私を、そして皆さんを生まれ変わらせてくださって、本来の目的に沿って生きる者へと造り変えてくださった、それが救いです。そのすばらしい方を、救い主をほめたたえていた、「四つの生き物と二十四人の長老」たち。彼らは「小羊の前にひれ伏し」ています。彼らはこの「小羊」を心からほめたたえています。

D. 礼拝 11-14節

そして最後11-14節まで、礼拝の要素が記されています。11節「また私は見た。」、これも「見た」ということばで始まっています。「私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。」。

1. 天使たち 11-12節

今私たちは、神の御座の周りに「四つの生き物と二十四人の長老」たちがいるのを見ました。今度はその周りに数えることのできないほど多くの天使たちがいるのを見ました。「四つの生き物」とは特別な天使たち、「二十四人の長老」は救われた者たちの代表でした。彼らはこの人たちが神をたたえているのに加わ

って、大合唱が起こって行くのです。12節「彼らは大声で言った。『ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。』」、主イエス・キリストのすばらしい救いのみわざを、その主の偉大さをたたえるわけです。ここに七つの名詞が記されていますが、最初の四つは「小羊」の特質です。どんなお方であるかを説明し、それをたたえています。後半の三つは人々のこの方に対する応答です。

① 「力」

まず最初に出て来るのが、「力」ということばです。「小羊」はご自分のみこころを、すなわちご自分のご計画を、御約束を必ず成し遂げることのおできになる方、つまり全能のお方である。約束されたことは必ず守る、この方に不可能なことは何一つない、そのことを覚えて御使いたちはほめたたえるのです。

② 「富」

二つ目に出て来るのは「富」です。この方はすべての所有者だと言っているのです。詩篇50:10-12に「森のすべての獣は、わたしのもの、千の丘の家畜も。わたしは、山の鳥も残らず知っている。野に群がるものもわたしのものだ。わたしはたとい飢えても、あなたに告げない。世界とそれに満ちるものはわたしのものだから。」と記されています。すべてのものは「わたしのものだ」と。この地球上に存在するすべてのものは、神がお造りになったのです。この宇宙も、神がお造りになったのです。ですから、この地上に、この宇宙に存在するすべてのものはあなたのものです、あなたがお造りになったものだと言って、天使たちがこの方をほめたたえるのです。

③ 「知恵」

三つ目に「知恵」ということばが出て来ます。あなたは最も知恵のあるお方です。この方の「知恵」はこの方がお造りになった被造物に見られます。世の中は不思議だと言うのです。我々クリスチャンは神の「知恵」だと言います。常識では判断できないお方、そこにいのちが存在する、そこに美しさが存在する、そこに完璧な法則が存在すると。そこに私たちはそれらをお造りになった創造主なる神の偉大な「知恵」を見出すのです。世の中のいかなるものをもって比較することのできない、神の「知恵」です。天使たちはそれを覚えて心からほめたたえるのです。

④ 「勢い」

四つ目に出て来るのは「勢い」です。先ほどの「力」とは違うことばが使われています。ここで使われているのは、キリストはその悪の力を制御するとかサタンに勝利するような力、そういうことばです。全能である神とともに、いかなる悪にも勝利することができる。サタンに対しても完璧な勝利を得ることができるお方、こうして天使たちはあなたは偉大な神だと言って、この方をほめるわけです。

そしてこの方に対する被造物の応答が出て来ます。

⑤ 「誉れ」

まず最初に出て来るのは「誉れ」です。すべてのものが膝をかがめてこの方をほめたたえるのです。あなたはそれにふさわしい唯一のお方です。

⑥ 「栄光」

栄光というのが出て来ます。栄光をお受けになるにふさわしいお方、それはただひとり神だけです。彼らは「小羊」なるイエス様、あなたは神だ。だからあなたは栄光をお受けになるにふさわしい方だと。

⑦ 「賛美」

そして三つ目に賛美が出て来ます。賛美されるにふさわしいお方だと。こうして天使たちは、これまでなされていた神様に対する賛美に加わって、神をほめたたえます。

2. 被造物たち 13-14節

そしてその後13節「また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。」、神によって造られたすべての被造物です。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」。13節を見た時に、「御座にすわる方と、小羊と」と同等に扱っています。「御座にすわる」父なる神と「小羊」、主イエス・キリストは同じだと、彼らを一つに扱っています。「御座にすわる方」だけにでもないし、「小羊」だけにでもない。「御座にすわる方と、小羊と」。被造物はみんなこの「小羊」イエス・キリストは神であると分かっているのです。この方に「賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」と。

この巻き物を受け取った時、特別な天使たちや救われた者たちがこの方をほめたたえる大合唱が起こりました。今度はそれに数え切れないほどの天使が加わって、一つの声をもって彼らの神であるこの「小羊」をたたえています。そしてそこにすべての被造物が加わって、この「小羊」をたたえる大合唱が起こるのです。聞いたこともない音量でもって、すべてのものが心を一つにしてこのすばらしい「小羊」を、主イエス・キリストをたたえるのです。感謝なことに、私たちもその合唱に加わるのです。一緒になってこの主のすばらしい救いのみわざを、この方の偉大さをほめたたえるのです。

最後14節に「また、四つの生き物はアーメンと言ひ長老たちはひれ伏して拝んだ。」、そのとおりだ、あなたはまさにそのようなお方です。こうして見ると神をたたえること、神を礼拝すること、それが救われた者にふさわしい応答だと思いませんか？我々は天に行って何をするのかを見て来ました。我々もこの方をひれ伏して崇拜し、この方をたたえ続けるのです。それはもう救われたその瞬間から始まっていることです。礼拝者として生まれ変わり、神をたたえる者として生かされているのです。私たちが日々の生活において礼拝者としてふさわしく生きて行くこと、いつも神をたたえながら生きて行くことがいかに大切かおわかりになるでしょう？天に行ってからするのではない。今もこの地上にあって私たちはそのようにするのです。そのように生きて行くのです。そのような者へと我々は生まれ変わったからです。この神、このすばらしい救い主、称賛に価するお方です。この方は神です。あなたや私を造ってくださった方がこんな犠牲を払って、あなたや私をその罪の中から救い出し、この方をほめたたえる者として造り変えてくださった。感謝しながら生きることです。この救いを喜びながら生きることです。そして我々が天に行った時に、罪から完全に解放されて、神をたたえながら、神を礼拝しながら生きる、その永遠が始まります。その時を待ち望みながら、今救われた者として、この神をたたえるという、礼拝するという生き方をもって神様に感謝を表し続けて行くこと、ぜひ実践しましょう。それがふさわしい生き方です。

〈考えましょう〉

1. 主イエスだけが巻き物を解くことができるのはどうしてでしょう？
2. 子羊の特徴である、「7つの角と7つの目」を説明してください。
3. 4つの生き物と24人の長老たちが子羊をたたえる理由を挙げてください。
4. 天使たちが子羊をたたえる理由を挙げてください。